

空き缶で折り鶴 職人技実感 商大生、町会と協力し工作教室

小樽市花園3丁目に住む職人たちが講師を務める「『花三』工作教室」が11日、市立図書館で開かれ、小中学生ら

約30人が、アルミ缶で折り鶴などを作った。

小樽商大の「商大生が小樽の活性化を本気で考えるプロ



ジェクト（マジプロ）」が主催。講師が所属する町会「花園東三丁目会」と連携し、地域の活性化に取り組む1年生3人が企画した。

折り鶴作り体験は2回行われ、計12人が参加。北海道職業能力開発大学校で、板金指導員を務めていた同町会の堀口雅行会長（73）が講師となった。

参加者は500ミリの空き缶を切り開いて板状にしたものに、堀口さんが用意した折り線代わりのシールを貼り、それに沿って工具で織り込んだ。参加した市立菁園中1年の江端はる音さん（12）は「折るのはすごく難しかったけれど、完成してうれしい」と話した。

堀口さんの指導でアルミ缶の折り鶴作りに挑戦する教室の参加者

誰でも楽しめる街発信

車いす対応の観光ガイドマップを作成

ふくし はな
福士 華菜さん 小樽

「車いすを使う方にも、フリーガイドマップ「ふら存分に小樽の魅力に触れて っとおたる」を作った。ほしい」。昨年3月、小樽 マップはA4判16頁。入商科大の授業の一環で仲間 り口スロープや幅1.6m以上4人と中心市街地のバリア の通路がある施設を紹介



「誰でも気軽に観光を」とバリアフリーガイドマップを作った福士華菜さん

し、短時間で小樽を楽しむモデルコースも載せた。「実際に街を巡る様子も見てもらい、『小樽は誰でも観光が楽しめる街だ』と伝えなかった」と話す。

授業が始まった2018年7月から、ユニバーサルデザインの推進に力を入れている沖縄県や三重県などの事例を研究した。9月には学生自ら車いすを使い、小樽堺町通り商店街や小樽運河周辺を調査。「店の入り口の1、2センチの段差でも乗り越えるのが大変だった」と不便さを実感した。12月には車いす利用者や福祉関係者と観光マップに必要な内容について話し合い、試行錯誤を重ねた。

北斗市出身で、高校時代は珠算部に所属。毎日3時間、週末は7時間の訓練で身につけた集中力と忍耐力が、マップ作りにも生かされたという。将来の夢は会計士。「財務諸表から企業を分析し、課題を解決したい」と思い描く。(日野夏美)

花園東三丁目町会 本気プロに協力

◎2020/1/11 ■イベント・観光, スポーツ・教育, 文化・歴史・芸術, 社会・経済



小樽商科大学(緑3)本気プロの町会と連携による地域コミュニティの活性化チームは、1月11日(土)10:00から15:00まで、市立小樽図書館(花園2)2階視聴覚室を会場に花三工作教室を開き、子どもや大人約30名が職人から技を教わった。



職人が多い花園東三丁目会の協力の下、地元の小学生らが、職人から技を直接学ぶ貴重な機会となり、もっと職人に興味を持ち、同町会の魅力を知ること、足を運ぶ人を増やし、このエリアの活性化を目指している。

堀口雅行町会長、千葉忠紋店・千葉家氏、町会員らが講師となり、折り紙の万華鏡とアルミ缶の折り鶴、紋の扇子制作体験が行われた。

堀口町会長は、「職人芸を掘り起こし、町会の活性化になればと思う。以前は映画館等があり大繁華街だった。畳屋・板金・写真館等もあり職人が多かった。改めて、思いを起こし、活性化のひとつになればと思う。ぜひ楽しんでもらいたい」と挨拶した。



10:00から、堀口町会長が講師のアルミ缶を使った折り鶴作りには6人の大人が参加。女性町会員2名が講師の折り紙の万華鏡づくりでは、子どもから大人まで7人が参加した。



町会の友人に誘われて参加した女性は、「初めてで、難しいところもあった」と話し、男性は「家の飾り棚に飾る」と満足していた。

とも展示された。

会場には、同町会の職人によるアルミ缶で作ったボールや、紋入りの扇子、畳職人の高橋嘉隆氏作成の畳コースターや網敷、職人の道具なども展示された。